

The Third Man について

—許されざる者—

植木 利彦

倉敷芸術科学大学教養学部

(1998年9月30日 受理)

I 序

*The Third Man*¹⁾では、コンラッドの“*Heart of Darkness*”においてマーロウがクルツという人物の救出に向かう過程でクルツについてのいろいろな噂を耳にし、そのことがクルツなる人物の人間性、ひいてはマーロウ自身の心の奥底を探究することになったように、マーティンズのハリー・ライムの死因とライムの交通事故現場に居合わせた第三の男を糾明する過程が、ライムの真の人間性の影の部分に影響され、自らをライムと同質の人間と考えていたマーティンズに彼はライムとは異質の人間であることを認識させ、ライムの影響を排して真の自己確立を達成させる試練となる。ペンドルトンはその関係を次のように述べている。

Like Marlow, he becomes an interior detective who explores himself through attempting to understand his relationship with Harry.²⁾

クルツと同じくライムは小説の当初より我々の意識に強く働きかけてくる人物である。それはマーティンズやキャラウェイ警部、アンナ、或いはライムの友人、知人から聞かされる間接的なライムの姿であり、本人が直接我々の目の前に現れることはない。つまり、我々は絶えずカーテンの向こうにいる彼の影の部分を見せつけられていると言える。このことは、マーティンズが学生の頃よりライムの異彩を放つ影の部分に惹かれたことと酷似しているようである。つまり、我々自身が学生時代のマーティンズと同じ立場に置かれて、ライムの強烈な個性を印象づけられていると考えてもおかしくない。従って、この小説におけるライムの死の原因を突きとめようとする過程において、マーティンズが次第にライムの真の姿を認識していくことになるが、その認識の程度が、マーティンズである我々一人一人のライムの認識の程度に繋がるものと言えそうである。

我々は幼年期、少年期、青年期を経て、一人前の成人になる。その間、学校教育や個人的な、或いは社会的な経験をもとに、道徳観や倫理観が本人の理性のなかに形成されていく。その過程で政治体制や民族的な特色によって、国ごとに道徳観や倫理観に多少の色合

いの変化が生じることは当然のことである。しかしながら、基本的なところにおいて、人間同士が協力しあい、共同生活を送らなくてはならない社会における道徳観や倫理観に格段の相違があるとは考えにくい。社会の構成員のなかには本人の住む社会の道徳観や倫理観を認めながらも、欲望に目が眩んだため、良心を裏切り、悪の道に走り、後悔の念に苛まれる者もあれば、自分を認めようとしないう社会に対する反抗心から、個人の道徳観や社会の倫理観に唾棄し、それらに刃向かい、破ることに優越感を覚える者もあろう。しかし、そうした人間も自分が行っている行為が反社会的な行為であることを自覚しているものである。*The Third Man* のライムは、このどちらのタイプにも属さぬ人間のように思える。

この小論では我々自身がマーティンズになってライムの人間像を明らかにしたい。

Ⅱ 狂気のエゴイズム

学生の頃、誰もが悪戯をした覚えはあるだろう。その悪戯の根底にあるものは好奇心であったり、単なる享楽のためであったり、時には権威に対する反抗の一手段であったりする。しかし、概して、罪のない、他愛ない悪戯に過ぎない。例えば、寄宿舎でライムが無断借用と称して、銃を持ち出し、マーティンズと共に兎を撃ったことにしても、ほんの悪戯に過ぎない。たいていの者はこうした時代を経て、子供っぽい遊びが馬鹿馬鹿しく感じる大人へと成長していく。従って、子供時代の悪戯は一過性のもので、後に尾を引くものではない。人は歳と共に社会の構成員としての自覚に目覚め、責任感を認識していく。ところが、ライムの場合は、そのような一過性の悪戯ではなく、彼の行う行為は生涯を通じて生活に変化と刺激を与える手段となっている。そして無意識のうちに自分を社会の規定の枠外に位置づけることによって、その行為のもたらす如何なる結果に対して罪悪感も良心の呵責も感じていない。

マーティンズが言うようにライムは、学校での成績もさほど良くなかったようである。彼は、勉学という平凡で退屈な学生生活というものには向いていないようで、いつも仲間がやらない突飛なことをやろうと考えていた。彼の能力からして、社会において指導的立場に立てる実力がなきにしもあらずといったところであろうが、飽きっぽい性格からして、地道な職業には適しているとは思えない。生活に変化を求めたいという彼の欲望は、その実現のためには、社会の規範を無視しても、自己の欲求を強く前面に押し出すところがあり、どことなく幼児的な特性を備えている。一方、マーティンズは、勉強は出来ても、いわゆる、先生の目を盗んで学生がよくやる悪戯ということになると、ライムの足元にも及ばない。だからライムは学生の間では注目の的であったことは容易に想像できる。子供の世界では、通常、仲間内での優劣は、儀礼的な面の強い大人の世界とは違って、比較的明確に態度や行動として現れるものである。従って、一般的には、大胆不敵なことをやる英雄的存在の者がドジな者を軽視するのが普通である。マーティンズの目からすれ

ば、彼のようなドジで、愚鈍な者が優れた者と同等に扱われ、仲間に入れてもらえた連帯感、ライムにたいする感謝の念で一杯であったろう。マーティンズにとってライムは頼もしい兄のような存在である。この仲間に入れてもらえた嬉しさ、同等に扱ってくれた寛大さが後年になるまでライムにたいする友情と敬意の念をマーティンズに抱かせた最大の原因である。この点について、トーマスは次のように述べている。

his (Martins) ideas of his own identity has always been bound up with his conception of the identity of Harry Lime.³⁾

マーティンズがライムの不敵な行動に感嘆し、彼という人間に傾倒したのは無理からぬことである。しかし、それは反面、ライムに傾倒する余り、ライムの特異な一面のみを見ており、ライムの真の人間的本質を見落としている。また、マーティンズが彼自身とライムを親友と考えることによって、二人の人間性を同質のものと錯覚し、彼自身の人間の本質をも見失っていることでもある。

ライムにとって権威の象徴である学校当局の規範を破ることは、見つければ、何らかの処罰を受けることは必定で、これこそ彼の求める刺激的な生活であると同時に、ほとんどの学生にはない不良っぽさ、大胆さを誇示できる機会でもある。しかし、見つかったり、捉えられたりするような不手際は失笑を買うことにもなりかねない。寄宿舎生活で何か悪戯行為がなされた場合、学校当局は、当然のことながら、下手人を見つけだし、処罰をしなくてはならない。下手人が見つからないと当局の詮索は非常に厳しいものとなり、最終的には真の下手人が発見されるかもしれない。そんな折り、悪戯を行った狡猾な者にとっては、自分は網の目を逃れ、代わりに誰かドジな者が当局に捕まり、しかも仲間の名を明かさずに、罪を被ってくれることが最も望ましい。その役柄にマーティンズがピッタリだったからライムがマーティンズを仲間に入れたのだと暗示するキャラウェイ警部の意見をマーティンズはいわゆる仲間意識からどうしても認めたくない。キャラウェイ警部の指摘するこの事実を認めることは、ライムを「同等の仲間」から単なる「狡猾な悪」に降格させることであり、惑わされていた自分の愚かさを認めることになる。従って、マーティンズのキャラウェイにたいする怒りは、キャラウェイの冷徹な分析力そのものに対するだけでなく、自分のライムにたいする信頼と友情と崇拜の牙城を死守したい願望の現れなのである。

ライムの行為が無害なものであれば、彼が自分流儀で生きることにとにかく言う筋合いではないが、気になることは、ペニシリンの闇取引に至るまでの彼の人生に見られる悪に走る必然性のなさである。彼が経済的に苦しい学生生活を強いられたり、差別を受けるといような社会に対して反感を抱く原因となるものが見あたらないのである。逆に、優れた知性に恵まれ、高等教育を受け、医師という資格を持っておれば、社会に出てからも生

活に困ることもないだろう。見方によれば、彼は社会の中のエリートといえる。ところが彼の勉学は、将来、社会において自分のなすべき仕事は何であるかに基づいて、勉学しているのではなく、自分が医師としての資格を取り得るか否かの可能性を確かめるために医学を学んでいるに過ぎない。従って医師としての資格を手に入れば、彼にとって目的は達成されたのであり、その後のことは問題ではない。これは幼い子供が自分の欲しい玩具を手に入れるため、他の子供と喧嘩までして、手に入れながら、手に入れた途端に興味を無くして、次の新しい玩具に目移るのと同じことなのである。すなわち、社会的訓練を受けていない幼児は、善悪の見境も、他人への迷惑も考えず、自己の欲望を満たすために、時には、泣き叫び、時には、人のものでも力づくで奪い取る。そこには、道德観も、倫理観も存在しない。ライムにはそのような幼稚さが性格の奥に潜んでいると言える。この子供っぽいライムの性格が堅実で変化の乏しい日常生活を嫌い、絶えず刺激と興奮を求めさせるのである⁴⁾。

ライムの行為には常に享乐的な雰囲気が漂っており、行為の結果よりは行為そのものを重視しているようである。従って、彼の行為は我々の目には利根的、自己破滅的なもので、その行き着く先に創造的な結果が予見されるものではないように思える。こうした彼の行為がいわゆる批評家達の目に子供っぽさを脱却しきれないライムと映っているのであろう。

実際のところ、ペニシリンの密売においても、稼ぐ金額の目標もなければ、稼いだ金を何に使用するか目的もない。ライムにとって目下のところ、密売が、置かれた現実の環境の中で上手く警察を出し抜いて、エキサイティングな生活を楽しむことができる一番手近な材料なのである。つまり、ライムは大战後の諸々の現実を悲観しているのではなく、他国に支配されているウイーンの現実には彼の子供じみた夢を実行する舞台でしかない。それは丁度、子供が山の中をジャングルに見立てて遊ぶ想像の世界と同じなのである。従って、彼の暗躍する世界の規制が強く、警戒が厳しく、罰を受ける危険性が高いほど、彼の冒険心は奮い立ち、成功すれば優越感と満足感を覚えることになる。すなわち、あらゆる点でライムは他人への思いやりもなく、個人的な道德観、社会的責任の認識も全くないエゴイストといえる。

The Third Man is interesting as an "entertainment" not because of the conventional morality it espouses (to wit: don't adulterate valuable medicines) but because of the way it endorses the amoral character of romantically rapid flight in strange places, of perpetual youth apparently maintained against all odds and of conspiracies against the *status quo*.⁵⁾

この点は、同じ悪人ではあるが、*A Gun for Sale*における、生きることの難しさ、社会の冷たい仕打ち、身体的な劣等感等から必然的に暗殺者の道を選択せざるを得なかった

が、アンの愛情と信頼を大切にしたいレイブンの人間性と人生に対する真摯な態度とは大きく異なるところである。

Ⅲ 無垢の悪

四国統治が行われているウィーンの都市は破壊され、分轄され、闇と雪に覆われてはいるが、それでも規制や法が適用され、個人の勝手な振る舞いを許さぬ我々の現実の社会と変わることのない世界である。しかしこのウィーンの都市の地下を網の目のように走っている下水道は地上の世界の四国統治の規制を受けることなく、どの地域にも自由に行き来できる世界である。いうならば、政治的、社会的な制約を受ける世界と何の制約も受けない自由奔放な世界が上下に二重構造をなして存在している。この構造は、道徳観や倫理観の制約を受け入れる成熟した社会的な人間意識とそれらの制約を嫌う奔放なライムの未成熟な意識を象徴する構図と考えられる。

従って、この地下の世界を熟知し、地下の世界と現実の世界を神出鬼没の如く動き回るライムは人の住めない世界に生きる人間、つまり、道徳観や倫理観もなければ、罪悪感もない世界に住む無国籍の人間ということになる。ライムは如何なる世俗的な価値観も認めなければ⁶⁾、如何なる社会にも属さない異邦人なのだ。道徳観や倫理観、法律の規制を守って生きている我々の基準からすれば、医師の資格を持つ人間がペニシリンを水で薄めたり、医薬品の粉末に砂を混ぜるなどということは医師の倫理観が許さぬ言語道断な行為である。また、大観覧車から下を見下ろし、蠅のように見える人影を指さして、「2万ポンドと引き換えにあの一つが動かなくなっても君は気にするかね?」、というライムの言葉は、医師としての医学に対する誠実さが感じられない。そしてまた、我々は、正直に税金を払い、年1000ポンドほどを稼ぐマーティンズや1週間働き、日曜日に行列をなして食べ物を買う市井の人を馬鹿にしたように言うライムには人生に対する真摯さがなく、と判断しがちであるが、ライムの行為は我々の日常的なこのような基準では計りかねる次元の事柄と考えなくてはならない。彼の動機には悪意は含まれていないのであろうが、その結果は実に悲惨で憎むべきものである。彼は悪い行為を行っているという自覚が全くなく、ひたすら刺激と変化を求めてしか生きていけない人間なのである。彼にとっては、生きていく糧が刺激と変化そのものなのだ。恐ろしいことにそれが絶えず繰り返され、エスカレートしていく。また、マーティンズを学校当局に捕まえられる筈にして、自分の安全を図ったこと、自分が安全なロシア地区に潜伏する代償としてアンナをロシア当局に売ったと推測される行為からして、彼にとってマーティンズやアンナのような善良な者たちは、精神的凡庸さの故に、道徳観や倫理観にとらわれているのであって、彼のような非凡な人間は、自分で掟を創り、あらゆることが許されていると考えているようだ。だから彼には友や恋人を裏切っても、良心の呵責はない。彼には友情、愛情といったものは人生において重要な位置を占めていない。つまり、我々は、彼の行為の善し悪しを判断するのではな

く、彼の人間性の表現として彼の行為を考えなくてはならない。

ライムは彼自身の世界に生きているのであって、アンナもマーティンズもライムの世界、或いは計画を構成している分子の一つに過ぎないのである。従って、彼にはその構成分子を自分の意志でどのように処理しようが、彼の感情に直接的な影響を残すものではない。つまり、ライムは愛や友情、義理や人情というような世間のしがらみには全く無縁の人間なのである。彼はいうならば、別世界の別の基準で生きている異邦人、我々のように普通に生きていくことのできない異分子的存在なのだ。だから身を挺して、変化と刺激のある彼なりの生活を求めたのではないだろうか？彼がマーティンズの呼び出しに応じて、夜の喫茶店に姿を現したとき、彼は警察の待ち伏せがあることを予測していなかっただろうか？それともまだマーティンズは決して彼を裏切ることなく、鼻面を持って思い通りに引き回せると自惚れていたのだろうか？拳銃を携帯していたことから、彼は常に警察の追及の手が伸びていることを意識し、危険性があることは予測していたはずだが、敢えて火中に飛び込み、警察を出し抜くことに彼は生き甲斐を感じていたように思える。

彼は暗闇の地下の下水道の世界を自由自在に動き回り、夜の闇に隠れて、ウィーンの都市を徘徊しているが、このことは彼の存在そのものが、明るい世界、正常な社会では息が詰まって生きては行けないことを意味しているのであろう。彼はどのみち、滅びる存在であったと言える。彼の最後の言葉、“Bloody fool”はそういう意味で、滅びる運命を選んだ自らに咥いた言葉だろうか？或いは、警察に協力し、仲間を売ったマーティンズの凡庸さ善良さにたいする恨みだろうか？それともマーティンズを自分の思い通りに操れると考えた自分の甘さに対して咥いた言葉だろうか？

IV 結 語

白昼、ある物体に強い日光が当たっているとき、物体そのものは背景と相まって、その姿をばやかすが、影のみが非常に強く際だつように、マーティンズは、何でもやってのけるライムを偶像化するあまり、ライムの真の姿は目に入らず、目に見える際だった影の部分のみを過大評価し、憧れ、理想化しすぎている。そして、学校当局に見つかり、叱られたことも自分の愚鈍さの結果だと自分自身を納得させているが、マーティンズとライムは人間的な本質においては異質の存在であると考えられる。マーティンズは安っぽい西部劇を得意とする作家ということになっているが、西部劇は、丁度、日本での古い時代劇の映画と同じように一般的には勧善懲悪が描かれている娯楽ものである。このことは、マーティンズが勧善懲悪を是なるものと認めていることであり、本質的にライムとは人間性において全く異質の存在であることを我々に強く語りかけるものである。彼はライムと異なった生活をするようになって、想念的にはライムに対する憧れは変化することなく残っていたことは確かである。しかし、アンナをソヴィエト当局に売り渡したことに怒り、多くの子供が粗悪なペニシリンのために落命したり、脳性麻痺に陥っていることに心

を痛めることは、マーティンズの精神の健全さの証である。そしてあの観覧車の上から蠅のように見える下の人間を見て言うライムの言葉に、マーティンズは初めてライムの真の姿を見たようだ。マーティンズもアンナも真のライムを愛していたのではなく、各々の人間が勝手に描き出したイメージを愛していたことを痛感している⁷⁾。

かつてのライムの魅力と思えたものは彼のエゴイズムとインファンティズムが映し出す黒々とした影にすぎなかったのだ。それまでライムが彼の計画の大胆さと奇抜さでマーティンズの心の目を眩ませ、自我の真の姿と虚像の影の部分との区別が付かない存在として見せていたが、あの観覧車の中でマーティンズは日の光に晒されたライムの真の姿、エゴイズムとインファンティズムの正体を見た。すなわち、人々が戦争に疲弊し、避けがたい不幸に見舞われ、破滅の淵をさまよいついていようと、人間の未来や、文明や、社会に対する義務感とはライムの意識からはきれいに切り除かれていて、つまらない、彼自身の個人的な欲望を満たすという問題が、彼の心を大きく捕らえている。にもかかわらず、ライムはペニシリンを入手し易い国際難民事務所で図々しくも博愛主義者のような顔をして人を欺いている。このエゴイズムこそ彼の行動の原動力であり、我々を震撼させるものである。彼は多数の人の中にありながら、自分だけが異邦人でありうるという意識に酔いしれている。一瞬の幸福のため、あるいは幸福の幻影のためにはなにものをも犠牲にできる彼のエゴイズムは許されるものではない。従って彼の気まぐれの代償が死につながることを我々はマーティンズと同じく確信していいはずだ。

アトキンズが言うようにグリーンにあっては、子供っぽい墮落は常に大きな悪なのであり⁸⁾、デヴィティスが言うように、ライムは、何処かで、どうしたわけか、子供の無邪気さと大人の邪悪さとを取り替えたピーターパンなのである⁹⁾。しかも、ライムの場合、彼の行動を規制する規範がないので、彼が生きているということは、彼が自分の気紛れを満足させるために果てしなく邪悪な行為を継続していくことを意味する。彼は成敗されなくてはならない。その役割がマーティンズに科せられている。デヴィティスはライムの悪に立ち向かうマーティンズの正義感そのものを彼に付き添う第三の男、キリストと言う¹⁰⁾。いずれにせよ、ライムの悪に立ち向かうことが、マーティンズの意識の中からかつてのライムのイメージを払拭し、彼がライムの魔力から解放される自己回復に繋がる。

In betraying and killing his friend, Rollo Martins ceases to be a buffoon and becomes a type of Judas ; in doing so, he gives features to his own "blank face". . . .¹¹⁾

グリーンが常々言うように、信頼は必ず裏切られるのである。マーティンズにとって幸運なことは、彼が既に35才という年齢に達していたことだ。彼は彼なりに人生経験を積んできたであろうから、「The Fallen Idle」のフィリップのような無垢な子供ではないので、「裏切り行為」から心に深い傷を受けることはない。否、むしろマーティンズは観覧車で

のライムとの別れに際し、「私を信じるんじゃないよ、ハリー」、とライムに声をかけたことは、マーティンズがライムの魔力から逃れ、自分の理性で事態を判断することを意味している。つまり、場合によっては、相手の期待を裏切る決断をすることもあり得ることをも示唆しているのである。

従って、ライムを撃ち殺すことは、子供っぽさに隠された破壊的なエゴイズムをマーティンズが善しとせず、彼自身の過去の思い違いに決着を付け自己回復を計るための絶対的に必要な手段であった。

只、アフリカの原始性に呑み込まれ、権力欲の高まりに比例して精神的に次第に墮落していき、最後にはどのような文化的な生活を送っていようが、人間の内に宿る悪ともいえる始源性の圧倒的な力の前にはなすすべのない人間の弱さに驚愕の叫び声を上げて死んでいった学識があり、宣教に情熱を燃やした文化人クルツの人間の苦悩と比較するとき、この *The Third Man* のライムは体内にできる癌細胞のような人間、すなわち単なる純粹悪の人間であって、それ以上でもそれ以下でもない。

Notes

- 1) Graham Greene, *The Third Man* (London: William Heineman & The Bodley Head, 1976),
- 2) Robert Pendleton, *Graham Greene's Conradian Masterplot* (London: Macmillan Press LTD, 1996), p. 82
- 3) Brian Thomas, *An Underground Fate: The Idiom of Romance in the Later Novels of Graham Greene* (Athens and London: The University of Georgia Press, 1988), p. 4
- 4) Peter Wolfe, *Graham Greene the Entertainer* (Carbondale and Edwardsville: Southern Illinois University Press, 1972), p. 128 ウルフは次のように述べている
 He undertakes rash acts because the repetitions and routines of plain living bore him.
- 5) Jeffrey Meyers, ed., *Graham-Greene: A Revaluation New Essays* (London: The Macmillan Press LTD, 1990), p. 165
- 6) R. E. Miller, *Understanding Graham Greene* (Columbia: University of South Carolina, 1990), p. 105
- 7) Peter Wolfe, p. 125 ウルフは次のように述べている
 Anna and Martins both learn the difficulty of loving people, that we often love our concepts of people rather than people in their own right.
- 8) John Atkins, *Graham Greene* (London: Calder and Boyars, 1966), p. 175
- 9) A. A. DeVitis, *Graham Greene* (Boston, Massachusetts: Twayne Publishers, 1986), p. 43
- 10) Ibid., p. 43
- 11) Brian Thomas, p. 11

On *The Third Man* —The Unforgiven—

Toshihiko UEKI

Faculty of Liberal Arts and Science,

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received September 30, 1998)

We grow up a respectable member of our society through our own childhood, boyhood and adolescence. During these periods, through a school life and many personal and social experiences, personal morals and social ethics are formed in a mind of each person. In that process, by the characteristic quality of political system and nationalism in each country there may be a little differences in morals and ethics. However, it is difficult to think that there are big differences in the morals and ethics of the human societies in which people cooperate and live together.

In these societies there are some persons who approve the morals and ethics of their society but are blinded by the lure of desires, break the law and are smote by their consciences. On the other hand there are others who hate the morals and ethics of their society, break them without reluctance and have a sense of their own superiority because of the rebellious spirit against the society which regards them as nothings. But it seems that Harry Lime in *The Third Man* does not belong to either type of these two.

In this paper we ourselves take Harry's place and like to understand Harry's real self.